

博士学位論文審査等報告書

審査委員 主査 宗田好史

副査 松原焄樹

副査 大場 修

1 氏名 杉本 直子

2 学位の種類： 博士（学術）

3 学位授与の要件： 学位規程第3条第3項該当

4 学位論文題目

歴史的建造物の活用による都市再生効果の研究

5 学位論文の要旨および審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

本研究は、都市再生の仕組みを商業・サービス業事業者の経営指標の推移から分析し、歴史的建造物を活用する事業者の役割と活用による経済効果を明らかにしている。

第1章は、まず都市再生政策、歴史的建造物と町並みの保存制度の発展過程を概観し、既往研究を歴史的建造物保存と再生、その利活用、歴史的町並みと景観、都市再生の4分野から検討し、本研究を位置付け、論文の構成を示している。従来、歴史的建造物の保存は主に建築史の分野から、歴史的都市は都市計画から研究され、関連する制度も別々に発展した。しかし、近年その保存から活用に重点が移り、都市再生効果に関心が集まることを背景として述べ、歴史的建造物活用の経済効果について社会経済を含む広い分野から検討した本研究の目的を述べている。

第2章では、まず日本政策金融公庫『小企業の経営指標』から業種ごとに総資本経常利益率、売上高総利益率、労働生産性等の経営指標の推移を示し、新業種登場と旧業種衰退を捉え、業種再編と都市経済の関係を説明している。次に、彦根市、長浜市、舞鶴市などを事例に、都心部での歴史的建造物を活用する新業種の登場と生産年齢人口の増加を捉え、家計消費支出額の推移と比較した。中でも売上高総利益率が高い厚利少売型業種が歴史的建造物を活用することで、従来の薄利多売型の大型店に対抗できる付加価値額をあげたことを示し、人口規模の小さな都市でも大都市並みの効果を上げていることを示している。こうした業種の転換による経営改善が都市を再生させると述べている。

第3章では、都市化のサイクル仮説から資本と人口の都心回帰が進む現状を示し、再都市化の段階で、歴史的建造物の活用が経済効果をより発揮することを示している。全国136の中心市街地活性化計画認定都市を用い、同計画の策定区域（都心）への人口、商業サービス業事業所数それぞれの都心回帰を、人口規模別に分析した。その結果、再都市化は大都市だけでなく、15万人未満の小都市でも見られ、特に歴史的建造物活用が小都市の再都市化を加速させたことを示している。静岡市などの事例から、都心の歴史的環境が経営指標のよい事業者を惹きつける傾向を示し、若い従業員が増え、付加価値額を上昇させ、都市全体の経済再生を進める仕組みを示している。

第4章では、さらに小さな町、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）のある市町村で同様の検討を続け、過疎化が進む重伝建地区でも、まずアーティストらが工芸品、美術品などの手作り商品に付加価値を付けて売る店を歴史的建造物に開き、より少ない投資で効果を上げる様子を取り上げている。さらに、奈良市奈良町景観形成地区で同様の効果が来訪者を増加させ、町家利活用が進み、新業種が増えた課程を詳しく示している。こうして、経営指標のよい事業者が小さな町でも都心回帰を起こし、町並み再生が進む好循環を起こすとしている。

第5章では、観光都市京都市東山区を取り上げ、経営指標のよい業種の中でも、特に近年売上高総利益率が上昇した飲食店を取り上げ、歴史的建造物の観光効果により都市再生が進んだ仕組みを分析している。全国では飲食店は減少しているが、経営指標のよい一部の専門性の高い飲食店が産寧坂重伝建地区を中心に増加し、近年さらに西側に広がった様子を示した。この社会現象を、統計資料を背景に用いつつ、経営指標の変化から丁寧に論じ、歴史的建造物活用の経済効果として説明している。

第6章は結論として、各章の研究結果を総括した。今後の課題を整理している。

本研究は、人口減少の中で都市再生を進めるために、経営指標のよい厚利少売型の商業サービス業が歴史的建造物を活用する必要性を述べている。その活用は都市計画手法として今後ますます重要になると述べ、歴史的建造物が備えた文化的価値を活かす事業者は、そこで得た利益を、その建物の保存活用に再投資することを指摘し、それが町並み保存の持続性であり、文化的価値を高める好循環であると指摘している。

歴史的建造物の活用の社会的意義を的確に捉え、小規模な商業、サービス業事業者がその活用を通じて都市経済を支える具体的な仕組み等を明らかにしており、たいへん有意義な知見を得ている。

以上より、本論文は博士論文の要件を十分に満たすものであると評価できる。

6 最終試験の結果の要旨

本論文の内容は、令和2年2月21日金曜日午前10時から午前11時にかけて、京都府立大学稲盛記念会館101講義室において公開による博士学位論文発表会で発表された。本人の発表を受けて、3名の本学教員をはじめ参加者から活発な質問や意見が述べられた。その主なものは、都市計画と経済学、経営学、社会学などの領域にまたがるこの研究方法論の独自性、特に経営指標を用いた付加価値の評価についての問い、さらに歴史的建造物を活用した事業者がえる付加価値の数値化について問う質問があった。また、この研究で得られた知見を、今後規模の小さな町や村でどのように活用できるかに関しても質問があった。それらについて、一つ一つ丁寧に、かつ適切に回答を行った。

以上、最終試験の結果は、公開発表会および審査会での結果を踏まえ、審査委員全員一致で合格と判断した。

以上